

# PHOTO JOURNAL

2013 SUMMER



## 写真で歩く世界の都市 BERLIN

ベルリンが写真の街としてにぎわい始めたのは、比較的最近のこと。それは、街の数奇な歴史の経緯と無縁ではない。分断の歴史を持つベルリンの過去と現在。それがいま、写真を通して見えてくる。

### 歴史の影が色濃く落ちる都市と写真の関係

ベルリンの近現代史には二つの分断がある。ひとつはナチス政権時代の12年間。そしてもうひとつは、40年間にわたる東西ドイツ分断の歴史だ。この歴史的事実がこの街のアート史、そして写真史に落としている影は大きい。1920年、ベルリンで生まれた現代写真の巨匠、故・ヘルムート・ニュートンは、ユダヤ系であったため亡命を余儀なくされ、名声を得てからベルリンに戻ってくるまで、この二つの分断の時代が過ぎるのを待たなければならなかった。

ドイツ統一後、ベルリンは首都に返り咲き、政治の中心地がこの街に戻ってきた。「世界最大の工事現場」と呼ばれたこの街のめまぐるしく変化する様子は多くの若者を、そしてアーティストおよび写真家を引きつけた。1990年代後半以降、名門ギャラリーがそれまでアートと写真ギャ

ラリーのメッカだったケルンからベルリンへの移転を始める。1997年には「カメラ・ワーク」がベルリンに設立され、2000年には写真ギャラリーとして25年の歴史を持つ「キッケン」がケルンからベルリンに移ってきた。そしてドイツ統一10年を機に、同年にベルリンで開催された「マグナム」の回顧展が開催される。手がけたのは大型ミュージアムではなく、フォトグラファーとデザイナー、建築家のオーナー3人によって設立されたカルチャーフォーラム「C/O Berlin」だった。

この間、世の中では何が起こっていたらうか？ インターネットが世界的に普及し、写真の世界にも急速にデジタル化が広がっていった。歴史はいつも同時性をもって進行する。ベルリンの過去数十年の歴史を振り返るだけで、決して人間の意思のみでは動かし得ない、神の手によって導かれる歴史の不思議を感じずにはいられない。そんな歴史に翻弄された街を「写真」を通して味わってみたい。

見市 知、荒井 剛=取材・文 峯岸進治=写真  
Text: Tomo Miichi, Tsuyoshi Arai Photos: Shinji Minegishi Map: Kenji Oguro

# INTRODUCTION



マティアス・ハーダー。美術史と哲学を大学で専攻後、1995年からフリーのキュレーターとして活動。2004年にニュートンによって財団のキュレーターに抜擢され、国内外で多くの展示を行う。

## Curator's Voice: Matthias Harder

ヘルムート・ニュートンとほかの写真家の作品を含む、ニュートン財団のすべての展示を一人でこなすマティアス・ハーダー。「70年代からの写真集がいまだに増刷されるニュートンほど、関心を持たれ、愛されている写真家はほかにはいないでしょう」。その理由を彼は、ニュートン作品の複合性を見る。「ヌード写真が多いゆえにニュートンは偏見を持たれやすい作家です。しかし彼は写真の持つ、覗く、覗かれるという二面性のエロチズムを明確に認識して作品を作った非常に頭のいい作家でした。コンセプトは作り込みますが、一方で撮影の状況に機敏に反応して魔法のような瞬間を捉える、天与の才能を持っています。彼の作品はモード写真であり、アートであり、記録写真でもあるわけです。写真のすべてが入っているのです」。

生前にニュートンから信頼を置かれていたハーダーは、ベルリンの国立ミュージアムのキュレーターにはない俊敏さと柔軟な思考、明晰さを兼ね備える。かつて彼が手がけた写真史におけるパパラッチについての展示は、国内外から評価を受けた。「ニュートンの写真は3回見てください。ぱっと見ただけではわからない作家の意図が必ず潜んでいます。それに気付いたとき、ニュートンとの対話が始まるのです」。こう、ニュートンの鑑賞法について、アドバイスをくれた。



大型判写真集『SUMO』に見る客。展示に沿った写真集が並ぶが、やはり一番の売れ筋はニュートンのもの。



Tシャツが並んだ店は1階の入り口に入った左側。個性的ではあるが、お土産に最適なプロダクトが揃う。



長い間使われていなかった歴史的な空間がリノベーションされ、2009年に展示室として蘇った。

## König.Taschen

国内外に29もの支店を持つ、アートブックに特化した出版社「ヴァルター・ケニッヒ」の直営店で、写真集専門店としてはベルリンで唯一。ヘルムート・ニュートン財団にあるこの支店は、写真集、写真雑誌、ポスター、雑貨など写真に関するものだけを扱っている。棚にびっしりと写真集が並ぶ様子は圧巻! 写真ファンの胸躍る品揃え充実のスポットだ。ニュートンの展示を観たビギナーがほとんどだが、わざわざ写真集を探しに来る人も多い。もちろんニュートンの作品も常時ラインナップされていて、タッセン社の大型写真集『SUMO』も置いてある。英語のできる店員は写真のエキスパートでもあるので、お気に入りを探したいなら気軽に話しかけてみよう。

## Helmut Newton Shop

Tシャツ、ピローケース、鏡、アクセサリー、リストウォッチ、メジャー、メモ帳などニュートンの写真をあしらった雑貨を提供するヘルムート・ニュートンショップ。ニュートンの写真入りグッズを揃えているのは世界でここだけ。ニュートンの全写真の著作権は、自らも写真家である妻のジューン・ニュートンが保有。彼女が公認するものだけが商品化されるので種類はあまり多くないが、値段は良心的。雑貨のモチーフとなる写真はすべてモノクロで、大ぶりのチェーンのブレスレットやヒールのレンタルゲン写真を使ったアクセサリーなど、フェティッシュな匂いとフェイク感、そして高級感をたたえたニュートンの作品世界をうまく置き換えたものばかり。

## Museum für Fotografie

主にプロイセン財团所有のコレクションを披露する3階の展覧会スペース。最近は、19世紀のヌードについての展示を行った。ニュートン財団がテーマに呼応する展示を行うが、時には3フロアが同じテーマで貫かれる場合もある。所有作品は、19世紀のドイツ写真の始まりの頃のものから、モホリ=ナジ・ラースローらの Bauhaus の作家や、カンディダ・ヘーファーの建築写真、カタリーナ・ジーヴァディングのポートレイトなどと幅広い。1920年代の映画会社 UFA の写真コレクションは、ここだけの特別な収蔵品だ。3階の展示室の空間は、かつてカジノ、劇場、図書館と変遷してきた。80年代にカンディダ・ヘーファーがこの場所を写した写真もある。

# INTRODUCTION

ベルリンが生んだ偉大なる写真家ゆかりの建物で  
思う存分、この街と写真の魅力を堪能しよう



右上:世界各国での展示ポスターを集めた1階のアーカイブ部屋。左上:2階の廊下に飾られた「ビッグ・ヌード」。赤の絨毯がニュートンのグラマラスな世界を表すよう。右下:ツォー駅の裏にある建物は昔、軍用カジノだった。下中:モンテカルロの自宅を再現した部屋。ポップアートなセンスに溢れた家具は本物。左下:服、カメラ、乗用車、手紙など遺品にはニュートンの内面が見えるよう興味深い。

## Helmut Newton Foundation

ヘルムート・ニュートンという伝説を伝える施設

ベルリンならではの写真スポットというと、まずはヘルムート・ニュートン財団の存在が思い浮かぶ。写真史に大きな名を残したニュートンが自作の永眠先として選んだ場所は、故郷ベルリンだった。

1920年にユダヤ系ドイツ人としてベルリンに生まれたニュートンは、ナチスが猛威をふるう1938年、カメラの入った鞄ひとつで一人ベルリンのツォー駅からアメリカに亡命した。その歴史的な場所の裏手にある財団の建物は、3フロアからなる。1階が服やカメラなど貴重な遺品を展示了した空間と、モンテカルロの仕事部屋を再現した空間、そしてヘルムート・ニュートンショップとアートブックショップ「ヴァルター・ケニッヒ」、2階はニュートンとほかの作家の写真展示スペース、そして3階がプロイセン財団の写真ミュージアム。別名「ニュートン・ミュージアム」と呼ばれるが、これほどニュートン本人と彼の作品世界に触れられる場所は、世界でもここしかない。

長年暮らし、仕事をしたパリでもロサンゼルスでもなく、なぜニュートンはベルリンを選んだのだろう? 自伝の中で彼は、あの独特のフェティシズムが色濃いエロスの世界が、子ども時代の経験からきていると告白している。彼の感性の土台は、20~30年代の退廃のベルリンなのだろう、そんな彼は死ぬまでベルリンを憧憬し愛した。ツォー駅裏というロケーションもニュートンが強く望んだ場所だったという。2004年の財団のオープンは、運命のいたずらで離ればなれになったニュートンとベルリンの街との和解を意味する。しかし開館を目前にしたニュートンは、皮肉にも自宅のあるロスで自動車事故により他界したのだった。

作家のルーツである乾いたベルリンの空気を感じながら、ニュートンの徹底した美意識を封じ込めた作品世界を堪能したい。

①Jebensstr. 2, 10623 Berlin Tel:+49 (0)30 3186 4825  
10:00 ~ 18:00(木 ~ 20:00)月休 <http://www.helmutnewton.com>

# MASTERPIECES

ドイツの人気写真家の作品を扱うアートギャラリーは  
写真をめぐる旅で必ず立ち寄りたい



2010年に行われた、初期作品を含むティルマンスの個展風景。ベルリンのほかに、ケルンにもギャラリーがある。© Courtesy of Galerie Buchholz, Berlin, Köln

## Daniel Buchholz

ティルマンスの初期作品にも会える

ヴォルフガング・ティルマンスを古くから扱ってきたギャラリーとして知られるダニエル・ブーフホルツ。2010年に話題を呼んだティルマンス展では、4部屋120m<sup>2</sup>のスペースに、初期作品を含む数多くの写真が展示された。ティルマンスのキャリアのスタート地点である、ユースカルチャーを瑞々しく切り取った作品群をいまも鑑賞することができる。

● Fasanenstr. 30, 10719 Berlin Tel:+49(0)30 8862 4056  
11:00～18:00 日・月休 <http://www.galeriebuchholz.de>



左：2012年のトマス・デマンド展「Model Studies」の様子。右上：デマンドの作品「Segel #49」。右下：「Goldstein #13」。

## Ester Schipper

トマス・デマンドを扱う有名ギャラリー

90年代半ばにケルンからベルリンに移ってきた名ギャラリー。当初はケルンとベルリンの2カ所に構えていたが、1997年に完全移転した。ケルン時代から写真ではほぼ唯一となる、トマス・デマンドの作品を扱ってきた。同じ建物にはアートブック書店のヴィーン・ルーカチュが入っている。ノイエ・ナショナルギャラリーからも至近距離の好立地。

● Schöneberger Ufer 65, 10785 Berlin Tel:+49(0)30 3744 33133  
11:00～18:00 日・月休 <http://www.esterschipper.com>



左：トマス・シュトルト展の様子。右上：シュトルトの作品「スペースシャトル」。  
右下：「Tokamak Asdex Upgrade, Interior 1」。

## Max Hetzler

シュトルト作品が映える広い空間

ジェフ・クーンズやクリストファー・ウールなど、エッジな現代絵画や彫刻を扱う一方で、トマス・シュトルトの写真作品を扱っている。2010年には、スイス・チューリヒのクンストハウス、デュッセルドルフのK20、ロンドンのホワイトチャペル・ギャラリーでの巡回展の一部として、ベルリンでのシュトルト展を手がけた。

● Oudenarder Str. 16-20, 13347 Berlin Tel: +49 (0)30 4597 7420  
11:00～18:00 日・月休 <http://www.maxhetzler.com>



左：ロドニー・グラハムの作品がかかる応接室。右上：左側に見えるのはジェフ・ウォールの作品。右下：オーナーのヨルク・ヨーネン。

## Johnn Galerie

ルフ、ヘーファーなど現代ドイツ写真の名作へ

建築と写真を中心扱うギャラリーとしてスタートしたが、1996年にまだブレイク前の奈良美智の展覧会をケルンで手がけた実績も。ドイツ写真ではカンディダ・ヘーファーやトマス・ルフを扱う。「彼らが偉大な理由は、独自のプレゼンテーション手法を発見したこと」とオーナーのヨルク・ヨーネン氏。アートにおける写真の可能性に注目している。

● Marienstr. 10, 10117 Berlin Tel:+49 (0)30 2758 3030  
11:00～18:00 日・月休 <http://www.johnngalerie.de>

# PHOTO GALLERIES

ドイツ写真の質の高さと歴史を感じられる  
写真専門ギャラリー

## Camera Work

充実したファッショナ写真

カメラ・ワークの設立は1997年。当時大型写真専門ギャラリーがなかったベルリンにおいて、その草分け的存在となった。ファッショナ、ポートレート、ヌード写真を中心としたアートとしての写真史のアイコンを数多く扱い、マン・レイ、ヘルムート・ニュートン、そしてニック・ブラント、ロバート・ボリドリなどの展示を手がけてきた。いわゆる歴史写真は扱わず、70～80年代のファッショナ写真がコレクションの中心。「ギャラリーの使命は、アーティストの評価を高めること」と語るように、ビッグネームだけでなく、若いフォトグラファーにもチャンスを与える「開かれた場所」として存在し続けている。

● Kantstraße 149, 10623 Berlin  
Tel:+49 (0)30 3100 7703 11:00～18:00  
日・月休 <http://www.cameralwork.de>



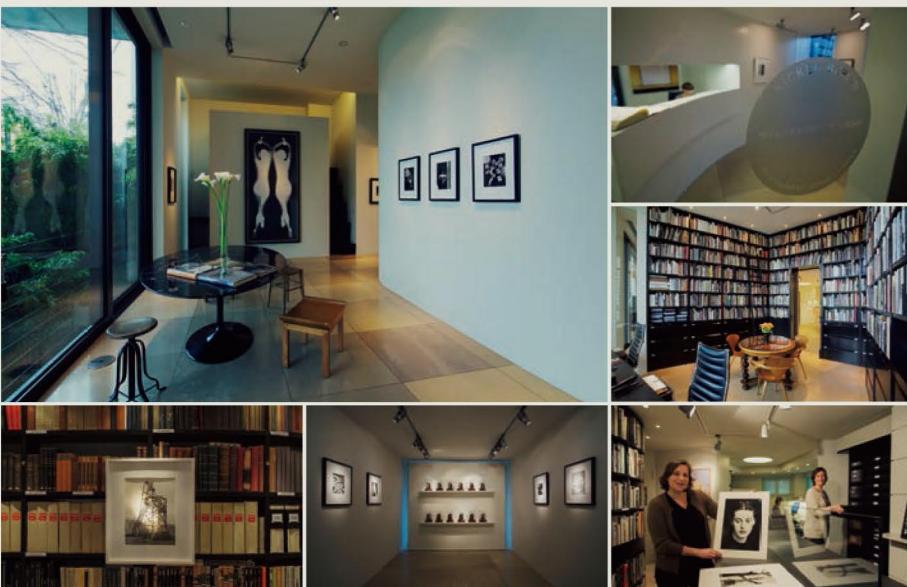
右上、中下：都会のオアシス的な雰囲気の事務所。左上、左下：ミシェル・コントの展示風景。90年代のファッショナ写真と、コントの新作映画「The Girl from Nagasaki」のスチール写真が展示されていた。右下：代表のベンヤミン・イェーガー。

## Kicken

ドイツ初の写真ギャラリー

1973年にドイツで初めて写真専門ギャラリーを開いた先駆的存在。首都移転後、アートの中心地へと変化したベルリンにいち早く目をつけ2000年に移転。ヘルムート・ニュートンの最初のギャラリストにして発掘者といわれる。コレクションは、マン・レイやモホリ=ナジ・ラースローら20年代の Bauhaus の写真家、ベッヒャー派のドイツ人作家、50～60年代の写真家など。20年代の作家の写真は貴重なオリジナルプリントを所有。値段はほぼミュージアムピースで、実際にミュージアムがオリジナルを借りにくくすることもある。オーナーのキッケンは、埋もれてしまった作家の作品を発掘して蘇らせる名手でもある。

● Linienstr. 161A, 10115 Berlin  
Tel : +49 (0)30 2887 7882 14:00～18:00  
日～火休 <http://www.kicken-gallery.com>



左上：優雅なギャラリー空間の設計はオーナーによるもの。右上：受付はハイバーモダンなデザイン。右中：ギャラリーの核となる図書室。右下：地下には顧客が作品を鑑賞できる場所もある。下中：マン・レイ展は人気が高い。左下：書架にも作品を展示。

## mono.kultur

写真家が作る人気カルチャー誌

ベルリン在住の写真家、カイ・フォン・ラーベナウが発行人兼編集長の注目のカルチャーマガジン。毎回一人のクリエイターをピックアップし、インタビュー以外の記事はすべて、取り上げられるク

リエーターが責任編集するスタイル。個性派女優ティルダ・スウィントンの号では、彼女自身が撮影した写真を披露。ドリス・ヴァン・ノッテンの号は、ラーベナウ自身が撮影したコレクション写真で構成。毎回クオリティの高い内容を提供している。これまで取り上げたのは、カールステン・ニコライ、デヴィッド・ラシャベル、マンフレッド・アイヒナーなど。<http://www.monokultur.com>



## Column

# ART & PHOTOGRAPHY

# ART & PHOTOGRAPHY

国立美術館も多く、現代美術が盛んな街ならではの  
アートとしての写真の愉しみ方

## Berlinische Galerie

ベルリンのアート史を写真でたどる

ハインリッヒ・ツイレからトーマス・デマンドまで、ベルリンの近現代史を写真で語ることのできる20万点に及ぶ膨大なコレクションを持つミュージアム、ベルリニッセ・ギャラリー。ベルリンのアート史を紹介するコンセプトで、コンテンポラリー・アート、絵画、建築と並んで、写真が大きな位置づけを持っている。かつてガラス倉庫だったという建物を改造した展示スペースは、大胆な吹き抜け空間が特徴。時系列に同時代の絵画と写真を展示してベルリンの近現代アート史を紹介するコーナーは見どころのひとつだ。19世紀のポートレイトや、都市のランドスケープが、当時のベルリンが最先端の「写真の街」であったことをいまに伝える。さらに、旧東ドイツの写真史を振り返ることのできる写真群も同館ならではの貴重なコレクションだ。

① Alte Jakobstr.124-128, 10969 Berlin Tel:+49 (0)30 7890 2600  
10:00 ~ 18:00 火休 <http://www.berlinischegalerie.de/>



左上：同時代の絵画と写真を展示したコーナー。左下：旧東ドイツ時代の貴重なパノラマ写真。  
中下：エーリヒ・ザロモンの写真作品。右上：ショップには写真集も充実。右下：外観。



## Martin-Gropius-Bau

歴史の現場を伝える場所

ポツダム広場の近く、かつてベルリンの壁が立っていた真横、19世紀には工芸美術館だった場所にマルティン・グロピウス・バウが移転したのは2001年。以来、写真を展示の主眼のひとつとして開催してきた。激動の近現代史を持つこの街自体が、写真の歴史に大きな役割を果たし、また多くの写真家の被写体となってきた。同館で展示が行われた、アンリ・カルティエ＝ブレッソン、マーティン・ムンカチら巨匠の作品にもベルリンはしばしば現れる。「写真展の特徴は、絵画や彫刻の展示に比べて若いビジターが圧倒的に多いことです」とジーゲルニッヒ館長は語る。街が写真家を刺激して発表の場を与え、さらにそれを観る人が新たに刺激を受ける。ベルリンにいることは、写真史の真っただ中にいること……そんなことを感じさせる場所だ。

① Niederkirchnerstr. 7, 10963 Berlin Tel:+49 (0)30 254 860  
10:00 ~ 18:00 火休 <http://www.gropiusbau.de>

## C/O Berlin

ドイツの写真シーンのけん引役

ツエーオー・ベルリンの設立は2000年。『フランクフルター・アルゲマイネ』紙のフォトグラファーだったシュテファン・エアフルトらが中心となり、マグナム・フォトによる「ドイツ統一から10年」を記念する巡回展をベルリンで開催したのが始まりだった。「当時、ベルリンには同展の受け入れ先となりうる機関が存在しなかった」とプレス担当のミルコ・ノヴァックは語る。以来、「ギャラリーとしてではなく、写真的展示施設として存在し、一方で、若者向けのワークショップや教育プログラムも多数開催。ベルリンの写真シーンの活性化に大きな役割を果たしてきた。今年3月、東側のミッテ地区を出て、西のツォー駅近くに引っ越しした。リニューアルオープンは今秋を予定。ベルリン写真史の新たな一幕がこの場所から始まる。

① Amerika Haus, Hardenbergstr. 22-24, 10623 Berlin Tel:+49 (0)30 2844 4160  
開館時間は未定 <http://www.co-berlin.org>



左上、左下、中下：ミッテ地区の旧郵便局建物内で最後に行われたクリスター・シュトレームホルム展。© David von Becker 右上、右下：シュトレームホルムの作品。© Christer Strömmholm

## Hamburger Bahnhof

現代アートミュージアムで名作写真に出会う

ベルリンを訪れるコンテンポラリー・アートファンが、必ず一度は足を運ぶ美術館がハンブルガー・バーンホーフ。古い駅舎をモダンに改装した建物空間の魅力もさることながら、ここにはコンテンポラリー・アートの王道とでもいうべきアンディ・ウォーホル、ヨーゼフ・ボイスなどといった名だたる作品が展示されている。代表的な写真作品ではアンドレアス・グルスキーの「図書館」、隣の部屋ではトーマス・シュトルートの「ペルガモン博物館」に出会うことができる。マルティン・キッペンベルガーのフォトコラージュは、来場者がスリッパをはいて作品の上に乗り鑑賞するという趣向になっている。「私たちはアートと写真を分けて捉えることはしません。フォトアートは、写真をメディアとしたアートなのです」とオイゲン・ブルーメ館長は語る。「コンテンポラリー・アートの世界では、アーティストが表現手段の垣根を超えて、さまざまなメディアを用いた表現を行うことができるのですから」。写真というメディアがアートの可能性を大きく広げた、ここではその軌跡に出会うことができる。

① Invalidenstr. 50-51, 10557 Berlin Tel:+49 (0)30 3978 3411  
10:00 ~ 18:00(木～20:00、土・日11:00～) 月休 <http://www.hamburgerbahnhof.de>



上：キッペンベルガーが自宅の床に張っていたというフォトコラージュ。左下：グルスキーの「図書館」(写真右)も展示されている。右下：オイゲン・ブルーメ館長。

## Neue Nationalgalerie

ミース建築の中で堪能するモダンアート

バウハウスの学長を務めたミース・ファン・デル・ローエの建築によるノイエ・ナショナルギャラリー。「Less is more（より少ないことは、より豊かなこと）」というコンセプトを反映した鉄とガラスを用いた建物は1968年に建てられた。ピカソ、キルヒナー、ベックマン、クレーなど、近現代アートの絵画と彫刻コレクションが名高い。また、2004年2～9月にかけて行われたMoMA展は、期間内に120万人という未曾有の来場者を集めるドイツ美術館史上に残る事件となった。そんな近現代アートの殿堂で、重要な写真展およびアート写真展もしばしば開催されている。2012年2～5月にかけて開催されたのが、ゲルハルト・リヒター回顧展。ドイツ現代アートの巨匠であり、その独特的な写真絵画でも知られるリヒターの80歳の誕生日を記念する回顧展は、ロンドンのテート・モダン、パリのポンピドゥー・センターを巡回した。同館周辺には近年、絵画館、素描館などの新たな国立ミュージアムが建設され、人気のアートエリアとしてペルガモン博物館などを擁するベルリン博物館島と対を成している。

① Potsdamer Str. 50, 10785 Berlin Tel:+49 (0)30 2664 24510  
10:00 ~ 18:00(木～20:00、土・日11:00～) 月休 <http://www.smb.museum/nng>



## Sammlung Arthur Ganay

建築写真の個人コレクション

トーマス・ルフ、カンディダ・ヘーファー、ハンス・クリスティアン・シンク、ゲツ・ディアガルテン、杉本博司、宮本隆司などの建築写真のみを集めたユニークな個人コレクション。パリで建築を専攻していたオーナーのデ・ガネは、杉本博司の作品に出会い建築写真に魅せられたという。2001年にベルリンに移転しベッヒャー派へと触手を広げた。収集の対象は、大判の作品のみで、ドイツ作家が重点を占めている。2003年には広大なスタジオを入手。収蔵数を増やしながら美術館での展示も実現し、不定期だが一般公開もしている。<http://www.collectionarthurdeganay.com>

# BOOKSTORES

## Do you read me?!

最新情報はやはり雑誌にあり!

アートギャラリーの立ち並ぶアウグスト通りにあるブックショップ。ドイツでは珍しい、世界各国の雑誌を中心に行うショップだ。「アートが40%、写真、建築、ファッションがそれぞれ20%くらいの配分でしょうか」とオーナーのジェシカ・ライツは語るが、例えばトマス・シュトルトの作品が表紙を飾る植物雑誌も置いている。最先端のフォトマガジンと並んで、なかなか手に入りにくい写真集が見つかるのもここ魅力だ。

① Auguststrasse 28, 10117 Berlin-Mitte  
Tel:+49 (0)30 6954 9695 10:00 ~ 19:30 日休  
<http://www.doyoureadme.de>



左:雑誌が手にとりやすいよう、表紙が見やすく並べられた店内。右上:最近シェーネベルク地区にオープンした2号店のリーディングルーム。右下:オーナーのジェシカ・ライツ。



左:店舗内観。右上:ベッヒャー、シュトルト、リンドバーグなど、写真集の種類と蔵書量が豊富。右下:電車の高架下にある店内は細長く奥行きがある。

## Bücherbogen am Savignyplatz

高架下の老舗書店

奥行きのある店内には豊富なアートブック、写真集が並ぶ。建築、デザイン、アート、そして写真の専門書店としてオープンしたのは、まだベルリンの壁が存在した1980年のこと。このあたりは西ベルリンの高級エリアであるシャルロッテンブルク地区だ。ザビニーブラツツ駅脇の、Sバーンの高架下というユニークなロケーション。カメラ・ワークなどの有名ギャラリーやベルリン芸大からも近い。

① Stadtbahnbogen 593, 10623 Berlin Tel: +49 (0)30 31869511  
10:00 ~ 20:00(土~18:00)日休 <http://www.buecherbogen.com>

## Column

### Peperoni Books

強い信念が築いた独立系出版社

写真家ハネス・ヴァンダラーによる写真専門出版社。両親が印刷工を営んでいて幼少から印刷術に親しんだ彼は、ベルリンの閉店した空き店舗を撮影した写真集「Time Out」を自費出版。それが話題となり出版社としての道を歩むこととなる。写真家と一緒にコンセプト、デザイン、印刷の指示、



左:有名作家から無名の若手まで、写真集の品揃えが充実している。右上:アーティストによる手作りのジンも多い。右下:店舗外観。

## Motto Berlin

若手作家のジンも多く揃う

下町の雰囲気漂うクロイツベルク地区的アートブック書店。フランス人オーナーのアレクシス・ザビアロフは、最初スイスのチューリヒで車1台で書籍販売を始め、その後雑誌を発行し、2008年にベルリンにこのショップをオープン。店内の一角落には若手アーティストやフォトグラファーの持ち込みによるアートブックやジンが山積み。ベルリンらしいオルタナティブ感あふれる書店で、掘り出し物が見つかりそうだ。

① Skalitzer Str. 68, im Hinterhof, 10997 Berlin Tel:+49 (0)30 4881 6407  
12:00 ~ 20:00 日休 <http://www.mottodistribution.com>



# BOOKSTORES

目利きによる厳選された本が誇らしげに並ぶ  
ベルリンの個性派ブックショップ

## 25 Books

リコメンドリストにファン多し

店内に入ると、中央に細長いテーブルが置かれ、その上にいまお薦めの25冊が並んでいる。これが店名の「25 Books」の由来だという。オーナーのハネス・ヴァンダラーが、出版業のペペロニ・ブックスと並行して2009年にオープンした。フォトブックショップとして、またペペロニ・ブックスのショールームとしてこの場所で展示やイベントなども行いながら、ベルリンの写真シーンに欠かせない存在として機能している。

① Brunnenstr. 152, 10115 Berlin  
Tel:+49 (0)30 4373 5707 14:00 ~ 19:00  
日~火・木休 <http://www.25books.com>



左:店舗内観。細長いテーブルの上に25冊の本が並ぶ。このセレクションを楽しみにする客も多い。右上:店舗外観。右下:オーナーのハネス・ヴァンダラー。

## Pro qm

トークイベントも頻繁に開催

書店が知識人たちのディスカッションの場であるという、ベルリンの伝統を守り続ける古株のアートブックショップ。建築、哲学、アート、デザイン、モードなどの分野を扱う。写真集はティルマンスラベルリンで活動する作家のほかに、建築写真であれ、人物写真であれ、ベルリンに関する写真集のコーナーがあるのがこの特徴。ほかに写真理論の書物も多い。ベルリンのデザイナー Blessが作ったオリジナルのエコバッグも。

① Almstadtstr. 48-50, 10119 Berlin  
Tel:+49 (0)30 2472 8520 11:00 ~ 20:00 日休  
<http://www.pro-qm.de>



左:場所は東ベルリンのトレンド地区ミッテ。1925年に建築家ハンス・ベルツヒが設計した、バウハウスを思わせる機能的な空間。右上:オープン12周年を祝った店オリジナルの記念出版物。右下:階段の段差を使って雑誌などを置いている。定期的に討論会を行う。

## Wien Lukatsch

隠れ家サロン的アートブックショップ

ベルリン・アートシーンの中心ともいえるミッテ地区のリニエン通りから、シェーネベルク地区に店舗を移したのは2011年。理由は「場所が広くて家賃が安かったから」とオーナーのバルバラ・ヴィーンはあっさり言い放つ。シュプレー川沿いにある閑静なアルトバウの建物の中にアートブックショップとギャラリーが同居している。隠れ家のサロン風の同ショップを訪れる人々は、やはり心からアートや写真に興味のある層なのだという。

① Schöneberger Ufer 65 3rd floor, 10785 Berlin  
Tel:+49 (0)30 2838 5352 13:00 ~ 18:00(土12:00 ~)  
日~月休 <http://www.wienlukatsch.de>



左:広々とした店舗スペースが魅力。右上:ベッヒャー、フェルトマンなど写真集やアートブックも充実。右下:オーナーのバルバラ・ヴィーン(左)とヴィルマ・ルーカチュ(右)。

# PHOTO SITES

カフェやバーでも一流の写真に出会える  
それがベルリンの魅力



上:外観はレトロな雰囲気。下:ユルゲン・テラー撮影によるイヴ・サン・ローランのポートレイトが異彩を放つ店内。

## Paris Bar

偉人たちの貴重なポートレイト

古き良き西ベルリンらしさをまだ残しているカント通り周辺。この通りにカフェレストラン、パリス・バーがある。オーナーのミヒエル・ヴュルトレはオーストリア人のアーティストで、もともとフランス軍が所有していたこの店を1979年に引き継いだ。店内には、多くの一流アーティストとの交流を示すユニークなアートと写真のコレクションがひしめく。中でも目玉はユルゲン・テラー撮影によるイヴ・サン・ローランの巨大ポートレイト。ほかにも、現代アートの巨匠ヨルク・インメンドルフの若き日のポートレイトなど、お宝的写真に出会える貴重な穴場だ。

② Kantstr. 152, 10623 Berlin  
Tel:+49 (0)30 313 8052 12:00 ~ 2:00 無休  
<http://www.parisbar.net/>

## Column

### Miss Read

ベルリンの秋を彩るブックフェア

今年で開催5回目にあたるベルリンベースのアートブックフェア。ベルリンを筆頭に世界各国から100店ものブースが出展される。期間中、アーティストトークやパネルディスカッションなど、さまざまなイベントが行われる。主催しているのは、ベルリンでビエンナーレを実現させたコ



上:オープン席はいつも多くの人で賑わう。下:オーストリア風の料理とコーヒー、そして写真が楽しめる店内。

## Cafe Einstein

写真を愛するクラシックカフェ

旧東ベルリンの目抜き通り、ウンター・デン・リンデン。オペラ劇場やコンサートホールの多いこの界隈にあって、サロン的なカフェレストランとして存在感を放つカフェ・アインシュタイン。併設されているギャラリーでは年に5回展示が行われ、写真展が主流だ。これまでにデニス・ホッパー、ヴィム・ヴェンダースらの写真展が話題を呼んだ。オーナーのゲラルド・ウーリヒは俳優、舞台監督としての経験をもつ。セレブ客も多い有名店でありながら、オープンで居心地のいい店内の雰囲気は、そんなオーナーの演出力の賜物なのかもしれない。

② Unter den Linden 42, 10117 Berlin  
Tel:+49 (0)30 2043 632 7:00 ~ 22:00 無休  
<http://www.einsteinundl.com>



上:シックな店舗外観。下:店内1階フロアの壁を覆う「ビッグ・ヌード」。暗い照明の中で見ると、逆に迫力満点。

## Newton Bar

バーでニュートン作品に浸る

ヘルムート・ニュートンの作品世界が体感できるバー。店内にかかるニュートンの代表作「ビッグ・ヌード」、ニュートンにちなんだ「アブソルート・ニュートン」という名のカクテルや大理石と革のソファーのインテリアが、贅沢で退廃的な空間を作りだしている。ニュートン自身も存命中、ベルリン滞在の折にはふらりと立ち寄っていたという。場所は、18世紀にユグノーと呼ばれた亡命新教徒とのゆかりが深い、フランス的な雰囲気が漂うジャンダルメン・マルクト周辺。ここで、亡命の末ベルリンに再び居場所を見出した巨匠の心境に思いを馳せてみるのも悪くない。

② Charlottenstr. 57, 10117 Berlin  
Tel:+49 (0)30 2029 5421 10:00 ~ 03:00(金・土  
1:00 ~ 4:00) <http://www.newton-bar.de>



左:ギャラリー内観。右上:ベルリンの写真家50人の作品を集めた展示のオープニング風景。右下:設立メンバーのミヒヤエル・ビードヴィツ(左)とベルンハルト・モースバウアー。

## Pavlov's Dog

写真家たちのコレクティヴスペース

ベルリンで活動する写真家は多いが、無名の若手写真家を積極的に紹介する写真専門ギャラリーが少ないことに目をつけ、フォトエディター、フォトグラファーら5人が集まって2011年に始めたギャラリー。若手作家の展示を中心に、ここに集う人々のつながりを深めることのできるような出会いのきっかけとなるギャラリーを目指している。

② Bergstr.19, 10115 Berlin Tel:+49 (0)30 5316 2978  
16:00 ~ 20:00(木~土) またはアポイント <http://www.pavlovsdog.org>



左:ギャラリー内観。右上:フランス人女性写真家カミュー・ヴィヴィエの作品。右下:オーナーのキルステイン・ヘルマン。

## Galerie für Moderne Fotografie

旧東ドイツのファッショント写真にフォーカス

『ヴォーゲ』ドイツ版などのファッショントでスタイルとして活躍したキルステイン・ヘルマンが2008年に開いたアート、ファッショント写真中心のフォトギャラリー。その経歴や旧東ドイツのロストック出身というバックグラウンドから、東ドイツ時代のファッショント写真に注目。発掘・紹介することが、ライフワークの一部になっているとか。

② Schröderstrasse 13, 10115 Berlin Tel:+49 (0)30 2758 1033  
12:00 ~ 18:00(木~土) またはアポイント <http://galeriefuermodernefotografie.com>



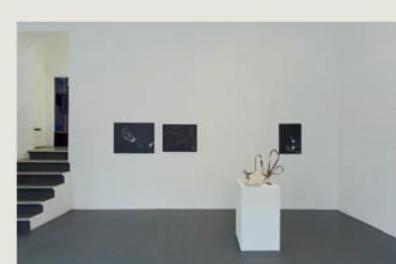
毎回出版は500冊限定ですべてに作家のサイン入り。オリジナルプリント入りのコレクター本も同時に発売する。

## Only Photography

出版社に併設されたギャラリー

グラフィックデザイナーのローランド・アウグストによる写真専門出版社オンリー・フォトグラファーのショールーム兼オフィス。年2回、写真集の出版を行い、ギャラリーでは出版のためのプレゼンテーションと独自の展示を行っている。ドイツ人作家以外に、東松照明や須田一政などの日本人写真家の出版も。ギャラリーでは写真集も販売。

② Niebuhrstr. 78, 10629 Berlin  
Tel:+49 (0)30 847 20 291 水~金:14:00 ~ 19:00、  
土:11:00 ~ 16:00 <http://www.only-photography.com>



写真と造形を組み合わせた若手アーティスト、ティナ・バイフスの展示風景。

## Galerie cubus-m

注目の新エリアの代表格

旧西ベルリンのシェーネベルク地区のハウプト通り沿いに近年、いい若手ギャラリーが増えてきた。クーブス・エムもそのひとつ。建築家だったホルガー・マルクアントは、もともとアーティストとのつながりが深く、アート展の設営に関わることも多かったという。ベルリンの写真家ヴィップケ・レーバーなど、次世代の作品を積極的に紹介している。

② Pohlstr. 75, 10785 Berlin  
Tel: +49 (0)30 8149 4690 14:00 ~ 19:00(火~金、  
土:11:00 ~ ) またはアポイント <http://www.cubus-m.com>



ウナギの寝床式に細長いギャラリーの内観。写真集出版を主眼に据えたギャラリー経営をしている。

## Kominek Gallery

出版を意識したスペース運営

アレック・ソスの初期作品『Looking for Love』を手がけたこともあるフォトギャラリーのコミネック・ギャラリー。商業写真家として仕事をしていた経験をもつミヒヤエル・コミネックは、写真集という形に残すことこだわるギャラリー経営をしていて「本を出すことが最終目的」と言い切る。新進作家の展示および写真集制作にも意欲的だ。

② Immanuelkirchstr.25, 10405 Berlin  
Tel:+49 (0)157 7144 1841 14:00 ~ 19:00(火~金)  
またはアポイント <http://www.kominek-gallery.com>

# MAP

